

## わが恩師

名誉教授 大橋 勝彦

私は大学を卒業して40年以上になりますが、私ほど多くの先生にお世話になった人はいないと思います。私は昭和39年岡山大学を卒業し、インターンを1年終え岡山大学医学部第1内科に入局しましたが、当時の教授は小坂淳夫先生でありました。肝臓の研究を中心テーマにした教室でありましたが、大学院に入学したため、基礎で仕事をしてくるように云われ、岡山大学第1生理の福原 武教授を紹介して頂きました。福原先生は胃腸管の運動生理で有名で、私は「悪心、嘔吐時の胃腸管運動」という研究テーマを与えられ、保健所でもらってきた犬を使っての実験を行いました。急性実験で何頭もの犬を使いましたが、今から思えば研究のためとは云え、可哀想なことをしたと思っております。福原先生は学問の上では厳しく、教室員もしばしば怒られるため、教室の中は絶えず緊張感が漂っていましたが、先生ご自身で外国の参考論文を読んで頂いたり、昼食時には教室員全員が集まりテーブルを囲んで食事をするといった家族的な一面もありました。また学会で私の発表に対して質問があった時、返答に困っていると、助けて頂いたうえ、その後ロビーでも質問者に対し激論を交されたことを覚えておりますが、学問の厳しさを持っておられました。

大学院で直接実験を手伝って頂いたのは、現在、川崎医療福祉大学の教授をしておられる福田博之先生であります。先生はお酒がお好きでありましたが、私の面倒をよくみて下さり、身体全体から vitality を感じる先生でもありました。現在も先生はその当時の研究を続けておられますが、私は一つの目標に向かって努力されておられる姿をそばから拝見し、素晴らしく、また羨ましくも思っております。

当時、第1内科の教室では博士論文の仕事が終わっていないと結婚はご法度でありました。私は幸い大学院での仕事が終わりを、30歳ではありましたが小坂先生の仲人で結婚することが出来ました。結婚式の日、先生が「大橋君のことは私が保証しますから。」と云って下さった時、私の親は喜んでいましたが、私は穴でもあったら入りたい恥ずかしい気持ちで一杯でありました。しかし、その反面ではうれしかったことを憶えております。第1内科に戻り、木原講師が率いる消化管グループに入りました。木原先生は色々と博学であり、消化管レントゲン検査、消化管内視鏡検査では名人芸でもありました。先生からは何事にも凝ることが大切なことを教えられたように思います。

その後、太田康幸医局長から、新設された川崎医大に行かないかとのお話を頂きました。第1内科の先輩で胆汁酸の研究で立派な仕事をされている平野 寛先生が教授になられ、肝・胆・膵を中心に研究する教室（消化器（I）内科）でありました。平野先生にお会いし、新しい教室の創設に期待を抱き、昭和49年4月付属病院開院と同時に講師としてお世話になることになりました。しかし創設当時はスタッフも少なく、患者の受け持ちから、色々な検査、学生の講義など、忙しい日が続きました。大学病院が町から離れていたため、患者は最初の頃はそれほど多くありませんでしたが、P S テスト、十二指腸液検査などの生理検査や、腹腔鏡検査、血管造影検査なども一人でせねばならず、そのうえ慣れない学生の講義と大変であったことを思い出します。しかし平野先生からは勉強になるご本を戴いたりして、肝臓の勉強を励まして頂きました。

新設の医科大学でしたから、色々な医療機器も沢山ありました。超音波診断機器もその一つですが、超音波検査は当時コントラストの強い白黒の画像で診断精度が悪く、誰も行う人はありませんでした。しかし何故か私はその超音波検査に興味を持ちました。超音波については何も知識がありませんでしたので、度々超音波の講習会に参加し、基礎的な知識を得たり、当時超音波検査をよくされていた国立がんセンターの小林利次先生や日生病院の横井 浩先生に直接検査の実際を教えて頂きに行きました。

当時、肝臓癌の診断は一般に、肝シンチと血管造影で行われていましたが、私は超音波検査を肝臓癌の診断に試みることから始めました。また徐々に装置のグレードアップをすることで少しでも診断に堪える画像を作るのに苦労しました。なお超音波検査は他の科でもする人はいませんでしたから、私が殆ど全科の症例をさせて頂きました。色々な症例が経験できたのは、私にとって幸せでありました。

川大に勤めてまだ間も無い頃、川崎祐宣理事長先生はまだ少ない病院スタッフを激励され、年末には私達を招いて鴨すきをご馳走して頂くこともありました。また私は先生の腹部超音波検査を何度かささせて頂きました。その時、万歩計を頂いたことがあります。肥満気味であった自分を注意をして頂いたものと思っています。また柴田 進学長先生には、「学生に分かるように講義するには、講義する内容について自分が研究しているものでなければならぬ。」と教わりました。その時はその意味が充分解っていませんでしたが、学生を教えるはじめ、つくづくそれを実感しました。

その頃、胆嚢検査は造影剤を使つてのレントゲン検査でありました。しかし造影剤のアナフィラキシーショックにより、人間ドックの胆嚢検査で、人が急に亡くなるということが時々新聞などで報ぜられるようになりました。そこで人間ドックでの胆嚢検査を超音波検査で行えないかということになり、昭和56年8月の第22回人間ドック学会で「人間ドックにおける

超音波検査の導入」というパネルディスカッションがありました。私はその時、パネリストの一人として招かれ、参加させて頂きましたが、超音波検査は胆嚢結石や胆嚢ポリープなどの胆嚢疾患のみならず、肝、腎、脾など腹部臓器の疾患の診断にも有効であることが分かり、現在、人間ドックでは一般に行われています。しかし自分が人間ドック超音波検査の始まりにいくらかでも係わる事が出来たと思うと感慨深いものがあります。

一方、超音波の学会ではその頃、超音波用語や診断基準を決めることに躍起でした。私も診断基準を決める委員の一人として、肝臓癌などの限局性肝疾患の超音波診断基準を決めましたが、現在も、この診断基準が広く一般に使われており、またその時のメンバーの多くが東大外科の教授など中央で今でも活躍されておられます。

超音波関係では多くの先生のお世話になりました。先程の小林先生はその後、産業医科大学の教授になられましたが、学会でお会いした時などよく私を励まして頂きました。また私が大学退官の時には、わざわざご自宅から電話して下さり、私の第二の人生について先輩としてこまごまご注意頂きました。横井 浩先生とはオーストラリアでの国際学会でご一緒させて頂きましたが、私の教授就任の祝賀会にはお忙しい中、駆けつけて頂き感激しました。先生は工学系の先生とも交流があり、色々な試作機の開発にも才能を発揮されましたが、分野を越えた人々との交流は色々利点があることを知らされました。超音波学会関係では、世界でも活躍され、学会をリードされている福田守道先生が、私が超音波学会に加入した初め頃、「急性腹症の超音波診断」の学会発表をしたのを褒めて頂き、「急性腹症については、まだあまり研究されていないから、頑張つて続けるように。」と励まして頂きました。私にとって大変うれしかったことを憶えています。超音波学会のもう一人の重鎮、竹原靖明先生とは当時よく行われていた超音波検査の講演会にご一緒に出して頂

いたりしてお世話になりましたが、超音波集団検診などでも色々教えて頂きました。当時大阪成人病センターにおられた北村次男先生からも色々教わりました。先生は脾臓の走査断面を一般とは逆に撮られ、それをご自分の信念から貫かれましたが、学者というものはこうでなければと思いました。超音波医学での大御所でもある和賀井敏夫先生にもご親交頂きました。先生はご郷里が新潟ですが、川崎医大にも新潟出身の先生がおられるをよくご存知で、先生は超音波検査の開発に携われ、NHKのプロジェクトXにも出られた偉い先生ですが、意外と親しみやすい方であることに驚きました。

その後、これらの先生のお蔭で超音波診断機器の性能は向上し、超音波検査は手軽に行える無侵襲な検査としてひろまって行きましたが、業者が行うセミナーも頻繁に開かれ、それが超音波検査の普及に一役買ったのではないかと思います。私が講師として参加したあるセミナーでは、国際会議場を借りきって学会さながらの盛況であったのを憶えています。

川崎医大の先生では平野先生の他、多くの先生にもお世話になりました。まず消化器内科(Ⅱ)教授の木原 強先生であります。先生は岡山大学でもお世話になりましたが、川崎医大に赴任になり、別の教室ながら色々貴重な症例を紹介して頂き、また超音波検査を続けることを励まして頂きました。同じく岡山大学第1内科から川崎医大にいられた先生で北 昭一先生は岡山大学では胃集団検診の仕事をされていまして、川崎医大で公衆衛生学教室を創られました。総合臨床医学(三)教室の教授を併任された時、私を招いて頂き、助教授にさせて頂きました。先生は岡山大学第1内科では医局長もされ、教室員の采配には定評がありました。その総合臨床医学(三)教室は倉敷駅前駅前の駅前診療所も受け持つっており、私は大学と診療所を往復しておりました。しかし、大学の方針で総合臨床医学が改組し、総合臨床医学(二)教室が駅前診療所を受け持つようになった時、

私は当時副理事長の川崎明德先生から超音波の教室を創ることを勧められました。しかし臨床を続けたいばかりに、それをお断りし駅前診療所に留まることにしました。駅前診療所は重本弘定教授が率いておられましたから、その後は重本先生のお世話になるようになりました。重本先生は学生の教育には大変熱心であり、また一方では先生の講義で遅れてくる学生は教室に入れないという厳しい面もお持ちでした。また先生はプライマリー・ケアの学生教育は内科系のみでなく婦人科研修を含めた外科系の勉強も必要とする主義を貫かれました。しかし先生は一生に一度は開業し、かかりつけ医になることを夢にもっておられ、その後、大学を去られました。

重本先生が去られ、私が駅前診療所を預かることになりましたが、幸い色々な科からの賛同者も加わり、本院とはまた異なる患者さまにより身近な存在として診療が出来ることを喜んでおりました。そして学生にとっても駅前診療所での臨床実習は自分達がこれから医者になるんだという自覚を持たせていると信じておりました。しかしその矢先、大学の事情で駅前診療所は閉鎖され、私達は本院に帰り、健康診断センターとして人間ドックや健診を行うことになりました。健診の仕事に専念するという一方で、私どもから去っていった同僚もありますが、山下貢司病院長先生からは、「これからは健康管理の時代だから…」と励まして頂きました。私は退官後も健診の仕事が続けておりますが、今それを思い起こし、先生のお蔭とっております。

川崎祐宣先生、山下貢司先生はご病気で、重本弘定先生も不慮の事故でお亡くなりになりましたが、今40年間を振り返り、このように多くの恩師に恵まれ幸せであったと思っております。しかし臨床医としての私にとっての恩師は患者さまでもありました。多くの患者さまを診して頂き、患者さまから色々なことを教わりました。病気のことだけでなく、人間としてすべてのことを教わったように思います。私は岡山

大学在籍の頃から色々な部署を転々としたため大きな業績は残せませんでしたが、その時その時は懸命に生きてきたつもりです。また色々な

仕事をして来て、色々経験出来たことは私にとっては幸せであったと思っております。